

平成25年 5月25日(土)  
15:00~17:30  
松山市文教会館 2F

## 生徒が学校を変える？

参加者：42名

登壇者：村上 親男氏（元道後中学校長）・村上 伸二氏（元愛媛県小中学校校長会長）讃岐 幸治氏（愛媛大学名誉教授）

### ① 平成14年から始まった、「夏祭り in 道後」の取り組みから

道後中学校が荒れて数年。やっと、落ち着きかけてきた頃、村上親男氏が校長として道後中学校へ赴任した。PTA・生徒会より8月に夏祭りを開催したいと申し出あり。14年の8月、最終土曜日に開催することになった。

#### 校長の立場

中学3年生にすれば、最後の夏祭りにはなるが、高校受験のための実力テストがあり、8月29日に開催してもいいかどうか悩んだ。道後中学校はお勉強の学校と認識していたこともある。

しかし、生徒会やPTAから「ぜひ開催したい」との要望があったので、保護者の方の苦情はPTA役員にお願いして、教職員は校長がどうかしようということになった。

夏祭りの出し物として、生徒会が「よさこいソーラン」を踊りたいという。そこで、保護者に指導をお願いして、ハッピーは南江戸まで行って借りてきた。体育館で幾度も練習を重ねた。参加した生徒は100人ほど。当日大いに盛り上がった。

翌年は、中西公民館長の力で道後の湯神社のハッピーを借りてきた。3年目には道後公民館が120着、道後中学校のためにハッピーを新調してくれた。

さらに、生徒会から花火をしたいとの申し出。当時のPTA会長にお願いして、1人2本の計算で400本の花火を用意してもらおうが、小学生の参加が多く中学生まで回らない。そこで、生徒会の生徒が気をきかせた。中学生は2人1本でお願いしますと言って回った。

中学生も大人も、誰かが「ぱっと」言ったことを誰かがすぐに受け止めてくれた。

翌年には、生徒会からの提案で、地域行事の盆踊りも取り入れたいとのことであった。生徒は公民館に出かけて行って、盆踊りの主催者と会い、道後地区で盆踊りをしている地域すべて回って、習ってきた。生徒から地域の方々へ「わたしたちの夏祭り、ぜひ、来てください」という声掛けがあったようである。

地域の人から、「閉鎖的だと思っていたが、いい教育をしているね」と話しかけられた。

校長としては、どんな事件があっても逃げない、責任はとるつもりでいた。

#### 当時かわった主な教師およびPTA関係者の話（当時の公民館長は平成25年3月御逝去）

当時のPTA会長：子どもがかわいそうと言うのが、当時の共通認識だった。道後中学校出身だが、通っていた時は、「文化祭などなんでもやれ」ということで、のびのびとしていた。保護者として、子どもが自分たちでやりたいことを見つけて、大人が支援することでやらせることができないかと考えていた。バザーにして



も益踊りにしても親が子どもに言う「従うか反抗するか」だが、自分たちが考えて実行するとすると、生き生きとして元気になる。夏祭りをきっかけとして文化祭においても、子どもたちが汗をかき、盛り上がった。

当時の教諭Ⅰ：当時、学校通信を発行した。平成14年、15年はいろんなことが起きたが、広く情報を発信することによって大きな問題にはならなかった。行事についても、生徒の意見を取り入れ、共に開催した。そのことは、生徒にとっても、教師としても感動することができた。難しい時代から、少しずつ立ち直っていったと思う。

当時の事務長：当時、夏祭り等のイメージを常に誰かが感じて仕掛けていった。子どもの自治力を引き出すために、大人が協力的に動いていたと思う。校長は子どもが投げかけたことに、目で見えるようにはっきり答えていた。生徒会の子どもたちは、校長に「ごくろうさまでした」ときちんと言葉に出して言えた。(但し、校長は「ごくろうさま」は目上の人に使う言葉、「ありがとうございます」と言うべきと笑顔で話し、礼儀について生徒に教えた)。

当時の教諭Ⅱ：公民館がビールを販売させてくれといったが、子どもの祭りなので断った。個人で飲むことに関しては問題にできなかった。

## ② 質問タイム

・学校便りについて聞きたい。道中だよりはもらった保護者が楽しみにしていたと聞く。その視点とか、どのように考えて発信したのか。

村上親男：保護者が読んで、楽しいものでないと学校通信とは言わないと思っていた。たいした思いで書いていたわけではない。誰かの手を煩わせたり、やらされていることであればやらないほうがいい。私が、印刷、製本して配っていた。

当時の教諭Ⅱ：校長についてどう思っているかと聞かれたことがある。戦術と戦略を使い分けている人だと言った。通信の写真の写り方も毎回違う。保護者は校長の顔を知らないからと、校長はいろんな方向から写真



を撮って通信に載せていた。教職員にも原稿を書けと言われたが、読み返すといい思い出となった。文化祭がつまらないという話がでたが、文化祭は総合的な学習の場、学校が荒れていた時期もあり、生徒主催というのはためられた。しかし、実際は生徒主体でいろんな行事ができた。

・夏祭りの開催日が、8月の最後の土曜日としたのはなぜか。

村上親男：最後より前の土日は、中学校全国大会、合唱の四国大会もあった。さらにその前はお盆。道後中学は、転勤で来た人や県外の人が多い。人が集まらないので思い切って始業式前にすることにした。

村上伸二：生徒はどういうものにしたいかと、いろいろ考えることで行事の大切さを知る。ギャップイヤーという言葉があるが、いろんな体験をして見聞を広げて、子どもは変わる。子どもの本当にやりたい思いを周りの大人が応援していく。道後中学校の子どもたちは、どのような取り組みでどのように変わったのか。

村上親男：就任したばかりの5月、保護者48名と校長1名で対決した。運動会の成績発表では生徒はしらけている、入場も順番を守らない、このままで高校受験も大丈夫なのか等、いろんなことを言われた。校長が全責任をとるということで話を終わらせた。

その年の運動会のフォークダンスでは、校長もPTA役員も入って生徒と一緒に踊った。子どもは、校長と手を組めたのが嬉しいとってくれた。また、冬にコートを着用したいという生徒会からの提案があったので、すべて生徒会に任せた。すると、ファッションショーを開催して自分たちで考え、派手なものや高価なものは似合わない、ダウンジャケットは机に入らないからだめと自分たちでルールを決めた。生徒に任せたらやれると思った。

当時の教諭Ⅲ：当時道後公民館館長であった中西さんがたびたび学校を訪れ、止めていた地域別懇談会を開

催して、地域と連携して道後中学校の生徒が楽しく通えるような学校・地域にしていこうといわれたことが印象に残っている。

讃岐幸治：「生きる力」これしかない。それには、子ども自身が自ら考えることが必要である。子どものやりたいことをさせるにはどのようにさせるかが問題だろう。地域・PTAと学校が信頼関係を結び、地域・PTAは子どもが地域の中に入って学校での悩みなどの相談等のできるセカンドとなり、学校長は「責任はとる」という決意をもって、子どもが「考えたこと」を体験させる。そうすることで、子どもは大人を信頼し、自分たちの置かれている立場を知り、話し合うことで、自己の責任についても考えることができる。

### ③ 班ごとの話し合い

- ・保護者は子どもの話を聞き、子どものやる気をサポートしていく。
- ・地域と保護者、学校がスクラム組んで、子どもたちの主体性を育む。
- ・学校を変えるための情報発信、だれが書くのか。また、筆者の思い、学校の行事や子どものこと、個々の思いなどを載せてほしい。発信は、公民館の回覧板だとタイムリーではないので、子どもの手によって配布されるか、ホームページ等を利用するといった。
- ・地域を巻き込むには、学校と地域、積極的な関係づくりが必要。計画の段階からかかわりできるだけお互いの思いを出し合っていく。教師のフットワークの軽さも必要。何か新しいことを開催するのに、催す側も楽しめるものにしていく。続けるためには組織がいる。
- ・学校に、地域がかかわることで、子どもがかかわることを知ってもらう。そのためには、子どものよりよい方向性について話し合い、積極的にかかわっていく。

村上親男元道後中学校校長

子どもたちから教えてもらったこと Do and go やりなさい。そして前進してください。

故中西道後公民館長

子どもたちの姿が地域に帰ってきた。大きな道後の変化。

わたしたちは嬉しい楽しいでやってきた。何でも協力したくてやっています。

(生前のインタビューより)

